

中野香織さん(富山)が「性とスーツ」翻訳



中野香織さん

富山市出身の中野香織さん(三)は東京大学非常勤講師、横浜市青葉区に『性とスーツ』現代衣服が形づくられるまで(アン・ホランダー著)を翻訳し、白水社から出版された。スーツを中心にファッションの歴史をたどり、衣服にひそむメッセージを読み解いている。服飾文化史の中で軽視されてきた男性のスーツを「セクシーな芸術作品である」と再評価するユニークな内容だ。

中野さんは富山市奥羽富田町の出身で、西洋近代文学やヨーロッパの地域文化、ファッション史などを研究している。英国ケンブリッジ大客員研究員だった一九九四年秋、アメリカ文学翻訳者の柴田元幸氏の紹介で翻訳に取り組み、三年がかりで仕上げた。テイラード・スーツの発展の歴史を女性服と密接に関連づけ、時代の美意識や男女の

緊迫した性の駆け引き、衣服 術史家の著者は、男性の体の制作をめぐる社会的・技術的形にびったり合わせて造った背景などを巧みに絡めとりながらファッションを論じている。

男性のスーツは、サラリー 魅力を感じさせるといふ。

衣服はメッセージ

冷徹な美術鑑定家の目



のに、性的エネルギーが潜んでいる」と言う。

西洋ファッションをリードし続けたのは男性服である。女性服は修飾性が高く、上平円。

見せるを同時に表現し、衣服身むきだし、下半身を厚いスカーツでくるむという分裂した形のまま固執したが、男性服を模倣することで近代化された。

今世紀後半になって、女性 は男性の衣装体系を奪った。自分たちに合うように修正し、今や新しい可能性を詰め込んで男性の手に戻している。

流行の男物のスポンやジャケット、ベストの多くが、女物としてデザインされた表情豊かな変種へと幅を広げ始めている。

中野さんは「著者は常識にとらわれず、冷徹な美術鑑定家の目でファッションを論じた。衣服は視点を变えて見ることで、さまざまなメッセージを語りかけてくると話す。

自分史大賞 作品を募集

日本自分史学会は第二回「私の物語・日本自分史大賞」の作品を募集している。

募集対象は、自己の事実に基づいて人生体験をつづり、平成八年十二月から平成九年十二月までに刊行されたもの(36)2249。

「性とスーツ」の表紙

マンの退屈な「どぶねずみ服」といったイメージがある。だが、中野さんはあとがきで、著者の提言も分かなりやすくまとめている。

ファッションには、隠すと